

上野駅にて

19番ホームには、僕らの外に輸行袋をかかえた一団が対峙していた。自転車の置き場所を巡って対立は避けられない見通しとなったので、僕ら是对策を協議した結果、この攻防に敗れた場合には片側のドアの封鎖も辞さないという結論に達した。しかし辛いことに、運転室を占領することができたので最悪の事態は回避された。ざまあみろ！通路やドアの前などに自転車を置いて乗客に迷惑をかけちゃあいなだらうな、あの連中は！

八甲田(列車)にて

闇の中をひた走る列車の中で、いよいよ腹が入ってきた僕らは安井パンの御登場を願った。なにしろ安井は食パンからマーガリン、レタスにハムにサラミに卵と、およそ一般人は持って来ないようなものを用意してくるからえらい。冷蔵庫の中のものを全て出してこなきゃならぬという理由があるにじてもた。特に安井マーガリンは力作だった。マーガリンの中に砂糖がまぶしてあって、これをパンにつけて食べたら合宿の味だった。

空が白み始めたころまた腹が入って、一人いい気持で寝ている安井に、「安井、安井パンもらうぞ！」と馬の耳に念仏して安井パンをまた食った。東の空はもう赤味がさしていて、東北の1日が始まるんだなあという実感がこもっていた。

佐井の見知らぬ海辺にて

第一日目にテンパったところは、佐井の町から数キロのところ  
で何の特色もないうらぶれた海岸だった。めしの用意も忙しく、  
風の中でガスの火を立たせようと懸命だったのだ。安井は、どっ  
かから板きれを捜してきて風よけにしようとするのだが足りなく  
て、僕らの顔を代わりに使おうというのか、「おい！だれもつら  
を出せ!!」などと言う始末だった。めしを食い終わったあとで、  
「ああ腹ふとった。なかなかうまかったじゃないですか。そう思  
いません？お～え、小島さん？」ちょっと味噌汁は塩からかった  
がなかなかいけた。「僕はこれからクリをしてきたいと思いま  
空には不吉な雨雲が広がりつつあり、その夜の雨は新テンでなけ  
れば耐えられないものだった。

佐井にて

ここでA班と落ち合った。金谷さんや曾我部さんなどの顔を見  
ると、なんとなくほっとした気分になった。近くには眠気うな顔  
をしたさえないやつが吉田さんといっしょにいたし、おじやま虫  
もいた。しばし言葉を交しているとき、港から船が一隻出ていく  
のが見えた。この船は脇野沢を経て青森へ行く船だという。ガビ  
ッチ！！次の日僕らは再び佐井の港へやって来て、船に乗るバエ  
か考察したのだった。こっから仏ヶ浦までは一時間ぐらいで行け  
るだろう。船賃がもうかるや。

## 仏ヶ浦にて

伝家の宝刀「押し」は間もなく出た。みんなの姿はもはやない。いや、いた。安井がシュツシュツヤっている。追い抜いたのもつかの間、ぴったり後について、「みんなに追いつけ追いつけ」と言う。船に乗らなかったのがガビッチだったのだ。佐井から仏ヶ浦までの間はジャリ道が延々と続き、海岸から遠くはなれ、山の中を登ったり降りたり。おまけに途中で食ったパンにはカビがはえてるとくりゃあ世話ないよ。

↓  
仏ヶ浦の上の売店まで来たら、店の人が「船がもうすぐ着くからいそいだ方がいいよ。」などと言うもんだからこっちは200mほどの階段をかついで走り降りるはめになった。下まで降りて、間に合っただかな、と安心していると、「その船はここには寄らないよ。」ときたもんだからどうしようもない。小島さんが受付のおえちゃんを拜み倒して船をとめてもらったからいいようなものを、そうでなかったら、僕たちどうなっていたでしょうね。仏ヶ浦の海に浮いていたでしょうか。

## 赤川駅(むつ)にて

恐山から田名部に帰ってきて、今夜の寝場所を捜していた俺らはおあつらえの無人駅を見つけた。待合室は広くてベンチがあり、戸も締めることができた。さ、そくめしの用巻に取りかかると、この駅を委託管理しているという近くのおばちゃんがやってきていろいろ親切にしてくれた。前日には同志社のグループも泊った

という。

ああ、めしを食った食ったという頃、急に外が騒しくなってきた。なにかと思つて外を見ると、子供ねぶたの山車が近づいて来るじゃないの。おおよと思つているうちに駅前広場は子供でうまり、窓から珍らしがって中を覗いている。いい見せ物だ。祭りよりこっちの方がおもしろいとばかりに窓という窓には小さな顔があった。

恒例の食後のコーラの分配が始まった。蟻の多い中でコーラに入らないようにするのはなかなか難しい。半分ほど飲んだところで、僕のコーラの中にとうとう蟻が入って飲めなくなりました。「僕も蟻が入ってないか聞きたいと思います。」安井がそう言つてコーラの入った食器をろうそくに近づけた途端、大きなかげろうが「ドボン！」とコーラの中に落ち、ばしゃばしゃ泳ぎ回った。それでも安井は冷静にかげろうを掴み出し、澄ました顔をしてコーラを飲み続ける。こんなところが人間とちょっと違つたなあと思つた。

一番列車が通過してからしばらくして、外がまた騒がしくなってきた。なんだろうと思つて目を開けた途端、「ラジオ体操第一！ 今日も一日元気にまいりましょう。まずはラジオ体操の歌から！」こっちは眠いんよ。

小川原湖にて

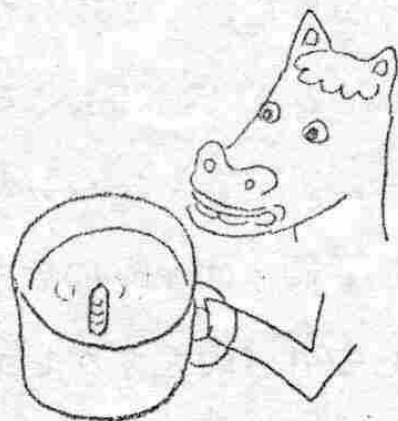
湖畔のキャンプ場には店屋がほとんどなく、とてもめしの材料

など調達できそうに思わなかった。そこで、小島さんたちが買い出しに行くことになり、安井と僕は残ってテントを張ることにした。テントを張ってしばらくすると、安井が「おーい、コッヘル持ってこいよ。」大テントを張って救助訓練に来ていた自衛隊の連中が豚汁と御飯を分けてくれるというのだ。安井と僕はコッヘルを持っていて肉ばかりの豚汁を大きいコッヘルに入れ、めしを小さいコッヘルにパンパンに詰め込み、これを逃がしたら梅根やみ足らずとばかりに豚汁はやかんにも満載し、自分の食器にもめしを詰め込んだ。これだけボリュームのある食事はかつてないことだ。豚汁は一人二杯はまわるだろう。あとは小島さんたちを待つばかりだ。ところがなかなか帰って来ない。帰って来たのは出発してから1時間近くたってからだった。「さあめしを食いませう。」と言ったらみんな急に不機嫌になって黙りこくってしまった。聞けば往復10数キロの道のりをとばしてきたのだという。僕と安井が腹をすかして待っていると思って。こちらは豚汁を前にして、早く食べたいなあ腹をならして待っていたのだ。どうもすいませんでした。「せっかく遠くまで行ってボンカレー買ってきたんだからつくって食うぞ。」「こんなにおかずがあるから僕はボンカレーまでは食べないと思います。」「それでも食うんじゃ。」「おまえらやかんまで豚汁入れやがって。中の汚れが落ちないだろ。あとでちゃんと洗っつけよ。」なんだかんだあったけど、やっぱり税金でつくった豚汁はうすかったのだ。

## 川要グリーンユースにて

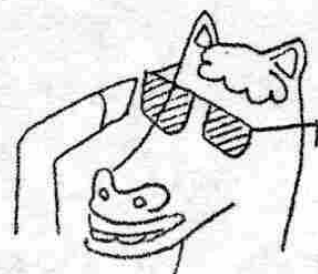
畠田さんたちと三沢で合流した日は、雨にたたられて走れる状態ではなかった。三沢駅から5キロほどのところに牧場が経営している川要グリーンユースというのがあり、そこの予約がとれたので、この日はユースまで走るだけにした。

このユースの朝はパンと牛乳で、牛乳は牧場からしぼりたてのを取ってきて好きなだけ飲ませるというので期待していたのだが、出て来た牛乳のなんたるすっぱさ。これがしぼりたての味かと感心しながら我慢して全部飲んでしまうと、だれかがヘルパーにこの牛乳はすっぱいと苦状を訴えた。ヘルパーは1口飲んで、もともと崩れた顔をさらに崩したので、牛乳は腐っていることが判明した。しょうがないんで代わりに紅茶を出してきた。こちらもしょうがないと思っ  
てパン食って紅茶飲んでいると、「おや、茶柱が立っている！」と安井が言うので覗いてみると、なるほど棒が立っている。しかしよく見ると、色が白く横に縞が入っている。「うじ虫だ！」とみんなが騒ぐなかを平然として安井は、「なんだ、茶柱じゃないのか。」といかにも残念そうに言ってその茶柱をすくい取り、再び飲み出したのだ。ますます人間との違いを見せつけられたことに僕は感慨を覚えた。



十和田市にて

この町のデパートらしきところで安井や山口が安物のサングラスを置いて喜んでいた。そのサングラスをかけて電機屋の看板を見て、安井が突然騒ぎ出した。



SONY

「なんだこのサングラスは！SONYの文字がだぶって見えるぞ！」やっぱり安物はだめだなあと思いながらその看板を見ると、僕にもSONYの文字はだぶって見えた。看板のデザインがもともとそういうものだったのだ。みんなの大笑いのなかで、やはり笑いながらも僕だけは安井に同情の念を忘れなかった。

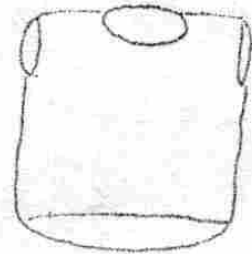
大沼ユースにて

この日は小雨が降っていて寒かったのでとてもテンパる勇気はなかった。ユースにかけ込んでロビーにしげ込んでいた。ようやく僕らの部屋が決まったとき、安井が「どの部屋だ？」と遠くから聞いてきたので、「しゃくなげ。」と答えてやった。「え？なに？」「しゃくなげ！」「え〜？」「しゃくなげだってば！」「なにい？しゃぶらないでえ？」僕は答える元気もなくなった。

ようやく夕食の用意ができたらしい。食堂へ行って自分でめしをどんぶりに入れていく。入れ終わった安井がどんぶりの中のめしをほうり上げてはもじし、みんなの注目を集めている。「こうするとめしがうまくなるんですよ。そう思いません。」負けじと

小川もめしをほうり上げ始める。ほうり上げる高さがどんどん高くなり、ついにめしは空中で爆発して無惨にもあたりに散らばってしまった。僕は反射的に小川から離れ、小川とはなんの関係もないように装った。

さて、いよいよ八幡平に向けて出発だ。雨が降っているので僕はアノラックを着てその上にポンチョを着る。装備は万全だ。ところが



が小川はヤッケを川要グリーンユースに忘れて来てしまったのだ。忘れ虫の小川は十和田湖の手前で焼山のめし屋にナップザックを忘れたのに気付く、10数キロの道のりを取りに戻った前料がある。なんと小川は大きなビニール袋、すなわちあの青いゴミ袋を頭からかぶり、穴を開けて頭と手を出してノースリーブのヤッケにしてしまった。体にぴったりフィットしていてゴミ袋も使いようである。

### 盛岡にて

僕らは集合日より2日も早く盛岡に着いてしまった。とりあえずめしをというんで近くの公園でめしを作ることになった。ここで問題になったのが言葉使いである。「～なわけ」というのは先輩にも後輩にも同じように使われ、よくない。「実に～」というのは他に言いようのあるものを、表現力の貧困の表われだ。というわけで、これらの言葉は禁句となった。「実に」というのを使ったのはもともと安井だったのだが、安井は今度は「誠に」



を使うようになった。「この肉は誠においしいですねえ。誠に。」  
結局この禁句令も効めはなかったようだ。ただ安井の「だれも」  
はこの夏合宿ではとんぼ直ってしまい、もはやあの「だれもクソ  
したわけ？」は聞けなく残りそうだ。

XX

最近、オカルトマージャンがはやっている。特にS<sub>2</sub>氏のオカルト  
は強力で、元祖オカルトも手がつけられないありさまである。  
S<sub>2</sub>氏のオカルトの特徴は、中、西、白、ろびのオカルト牌の双ポ  
ン待ちが多いことである。また、七対子でリー子をかけ、一発で  
振り込ませ、振り込ませた牌が表ドラでもあり裏ドラでもあると  
いう驚異的なはなれわざもやってのけている。その犠牲者は彼で  
あるが、しかしその最も悲劇的な犠牲者はなんといってもT氏で  
ある。彼はオカルトの威力に圧倒され、最近ではXX!、XX!  
と言って半狂乱になっている。僕は同情がやまない。このオカルト  
旋風がいつまで続くか見ものであると同時に恐怖である。

XX

